

一 橋 大 学 哲 学 会 報

一橋大学哲学・社会思想学会会報 No. 24
(「研究会便り」より通算第52号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会

発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局 tel./fax 042-580-8644

〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内

Email: phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp

URL : http://www.soc.hit-u.ac.jp/~soc_thought/conference.htm

第20回一橋大学哲学・社会思想学会

(研究会から通算50回)

【日時】 2016年11月26日(土) 10:00 開場

【場所】 一橋大学東キャンパス 第3研究館3F 研究会議室

【研究発表】

(午前の部)

10:30~12:00 王 燕敏 (社会学研究科博士課程) 司会 大河内 泰樹
「ホネット承認論に対する批判と応答」

(午後の部)

13:10~14:10 府川 純一郎 (社会学研究科博士課程) 司会 久保 哲司
「アドルノの自然美学の(ウン)アクチュアリテート」

14:10~15:10 岩田 健佑 (社会学研究科修士課程) 司会 森村 敏己
「初期ヘーゲル哲学における啓蒙思想観の形成」

15:30~16:30 真田 美沙 (社会学研究科博士課程) 司会 大河内 泰樹
「ヘーゲル哲学における導入と端緒について」

16:30~17:30 太田 浩之 (社会学研究科博士課程) 司会 森村 敏己
「アダム・スミス『道徳感情論』における自然神学」

18:00~20:00 研究懇話会 (はたご屋) 会費実費

出席を希望される方は、事前に事務局までご連絡ください。

(事務局連絡先 phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp)

目次

第20回大会案内	1
個人研究発表要旨	
王 燕敏	2
府川純一郎	3
岩田健佑	4
真田美沙	5
太田浩之	6
個人研究発表の募集	7

ホネット承認論に対する批判と応答

王 燕敏 (社会学研究科 博士後期課程)

アクセル・ホネットはヘーゲルの「承認」概念を定式化した上、諸個人が相互承認に基づいてのみ、自己実現へ至ることができると主張している。ホネットによって構築されたこの新たな承認論は、多くの学者に注目され、議論されている。本稿では、そうしたホネットの承認論に対して、ナンシー・フレイザー、アルト・ライティネンとハイキ・イケハイモが行った批判、そしてそれらの批判に対するホネットの応答を検討することによって、ホネットがいかにして自身の承認論を再定式化したのかを明らかにする。

そのため、本稿では次の二つの側面から考察が行われることになる。まず、第一に検討されるのは、フレイザーに対するホネットの反論である。ここでは、ホネットが、ヘーゲルの愛・権利・連帯という相互承認の関係を直接的に採用し、『再配分か承認?』で承認の圏域、承認の原理を区別したことを示し、彼の承認論が深化されたことを示す。そして、第二に、ホネットがユヴァスキュラ大学で行われたシンポジウムにおいて、自身の承認論を規範理論として十分に論述するために、どのように「承認」概念を修正したのか、そして、承認の闘争を合理的に説明するため、どのような根拠を探ったのかということを検討する。

以上の批判に対する応答を通して、まず、ホネットは、社会的な不正の根本的な源泉を明らかにするものとして承認論的転回を定位した上、「再配分」を「承認」のうちに捉えることで、フレイザーの正義論を一元論であるとして批判することになる。加えて、ホネットは、イケハイモ、ライティネン等との議論を通して、「承認」概念を反応行動として再解釈し、カントの尊重概念を通して、社会的な承認が道徳的な義務と結びつけられることで、「主体が自律性を発展させていく条件」となるとした。これによって、社会的な「承認」は倫理的な意味を持つことになった。さらに、以上の修正に加え、ホネットは承認の闘争を対象関係論、欲動理論と結びつけることによって、適切な承認の闘争の根拠を探っていたのであり、この点についても考察を行う予定である。

2016年11月15日発行

このように、ホネットは『承認をめぐる闘争』に対して、いくつかの核心的な要素を修正しており、そうした修正を検討することによって、彼がいかにして自身の承認論を「人間学、社会理論、政治学との相互作用」によって生じた論理として捉え直し、それを規範理論として提示しようとしていたのかを明らかにしていく。

アドルノの自然美学の(ウン)アクチュアリテート

府川 純一郎 (社会学研究科 博士後期課程)

本発表の目的は Th. W. アドルノの遺作となった『美学理論』(1970)において示された自然美学の今日的な有効性を探ることにある。この著作で明示された主張の一つは、19世紀芸術信仰の驕慢によりその地位を貶められた自然美の復権である。彼は「自然の言語」とも換言可能な「自然美そのもの」の経験が芸術に先行するだけでなく、芸術はこれを模倣し、再建・客観的に持続するものに落とし込む行為であると結論付けた。しかし彼のこうした自然美の名誉回復の努力は、その後の自然に対する美的言説の展開に貢献したとは必ずしも言い難い。彼の自然美の芸術への移行性の確保、或は両者の経験を共に「形象」の経験と統括する態度は、彼の死後、環境破壊問題に後押しされつつ急速な展開を見せた環境美学の一つの基本的姿勢、自然美の経験を芸術美のそれとは切り離して経験しようとする姿勢には、(A.カールソンの用語を借りれば)「環境モデル」に対する自然鑑賞の古き「芸術モデル」の一種として差置かれざるを得なかった。また彼の「自然の言語」の存在とその把握性に関する言説は、自然の美的承認を人間からの「一方向的」なものに限定し、自然における主体相似的なものの想定を「形而上学」と裁断する、世俗的・人間中心的自然美学の立場に立つ M.ゼールからは「照応的自然の形而上学への逆行」という手厳しい批判を受けることになった。言表の如何に拘らず、両者の学説は自然とその美的空間の保護の正当性を倫理的次元において構築しようとしている。そのような極めて真っ当な(かつそれは今日的な自然破壊の進展からして極めてアクチュアルであるとも判断して構わないと思われる)言説にとって、アドルノの自然美学は果たして接続不可能なものなのだろうか。

発表者はその接続可能性の追求の方法を、ゼールの批判内容を土台にした『美学理論』の掘り起こしに求める。発表者はその際、アドルノの「自然の言語」における二つの位相という解釈を示す。要約すれば、一つ目は歴史的存在でありながら神話的桎梏の内にある人間が自然に「他なる状態」のユートピア的表象を求めて成立する投影的位相であるが、二つ目の位相は同じく神話的桎梏に囚われた自然存在そのものが苦しみと共に同じ憧れを求めて発するというものであり、これは主体相似的なものとしての自然という想定を必然的に要請するものである。ゼールの人間中心的な姿勢と正面衝突する(それ故彼の批判の妥当性を裏書きしもする)後者の位相は、この言語を擁護する各研究者(J.フリュヒトル、A.ヴェルマー、G.シュヴェッペンホイザー)の言説においても隠微なものにとどまっていた。が、それだけに今日の美学からの自然保護支援への潜在的な接続可能性を秘めているとも思われる。というのも、この想定はアドルノが初期から思想的交流のあったベンヤミンとショーレムのユダ

ヤ神秘主義に系譜的な関係を持つが、そこから導かれる同じ救済乃至宥和状態への移行を求めるものとしての自然の承認という視座は、神学的・ドグマ的性格を超え、仮想的ではあれ自然との連帯という可能性を開き、今日の自然・環境保護の正当性を戦略的に練り上げようとする美学者の文脈への貢献・接続可能性があると思われるからである。

初期ヘーゲル哲学における啓蒙思想観の形成

岩田 健佑（社会学研究科 修士課程）

本発表では、G. W. F. ヘーゲルの初期著作及び草稿を検討することで、ヘーゲルがどのようにして啓蒙思想に対する評価を形成していったのかを検討する。

ヘーゲルが啓蒙思想に対して批判的な態度をとっていたことはよく知られている。主著の一つである『精神現象学』（1806）においては、啓蒙思想は自分自身では積極的な内容を持たないにも関わらず有用性を求め、信仰に対して形式的な批判を繰り返すものであると定義されている。さらにそうした無際限の批判の結果として「絶対的自由と恐怖」と題される政治的不寛容、すなわち革命を引き起こすものでもあるとされ、啓蒙思想に対しては総じて否定的な評価がなされている。この図式は、後年ベルリンで行われた歴史哲学講義においても繰り返されている。すなわち、『精神現象学』以降のヘーゲルにとって啓蒙思想とは第一に宗教への批判を主とする思想として定義されるものであり、第二に革命の原因とされるものである。このような観点において、啓蒙思想とは、ヘーゲルが積極的に提示する哲学に至るための重要な契機ではあるが、決して肯定的評価が与えられるようなものではない。すなわち、啓蒙思想は歴史的に一定の意味を有していた過去の思想であり、現代においてはその破綻を参照することしかできないようなものである。

しかしヘーゲルは、そのような啓蒙思想への評価を一貫して有していたのであろうか。言い換えるならば、『精神現象学』以前のヘーゲルもまた、啓蒙に対してそのような定まった評価を有していたのだろうか。神学生であったヘーゲルがテュービンゲン神学院において啓蒙思想に親しみ、フランス革命を賛美していたことは、ヘーゲル自身の草稿やローゼン克蘭ツによる『ヘーゲル伝』（1844）から容易に窺い知ることが出来る。さらにヘーゲルは、後にF. シェリングらの同一哲学とロマン主義に傾倒し、そして『精神現象学』において、自らが与していた同一哲学及びロマン主義への批判に転じた。このような一般に知られている遍歴を踏まえるだけでも、ヘーゲルの啓蒙思想に対する評価が『精神現象学』以前には不安定なものであったことは想像に難くない。

そこで本発表においては、ヘーゲルが『精神現象学』に至るまでに、どのようにして啓蒙思想に対する評価を構築していったか、とりわけ、どのようにして啓蒙思想を宗教批判の思想とみなし、さらに革命と関係づけるようになったのかを時系列に沿って考察したい。特に『ドイツ憲法論』（1802）に見られるような宗教批判と近代国家との関係がどのようにして啓蒙思想と関係づけられるようになったのかを主軸として考察する。

ヘーゲル哲学における導入と端緒について

真田 美沙 (社会学研究科 博士後期課程)

ヘーゲルにおける端緒(始元) *Anfang* の問題については、ヘンリッヒが『コンテクストにおけるヘーゲル』(1971)でとりわけ存在と無のかかわりから解明を試み、フルダは『ヘーゲル論理学における導入の問題』(第一版1965、第二版1975)において、『精神現象学』がヘーゲルの哲学体系のなかで果たした導入 *Einleitung* の役割を論じた。ヘーゲル哲学における導入と端緒は、このようにヘーゲル研究史のなかでもさまざまに論じられた問題である。そしてこの哲学の導入と端緒をめぐる問題は、ヘーゲル自身が『差異』論文のなかでも行ったラインホルト批判に根差している。

この問題は、90年代に入っても取り組まれ、ルーカスのヘーゲル講義録に着目した研究により、フルダの研究が「導入としての現象学」に重点を置くあまり、「予備概念」に重要性を認めていない点が指摘された。2013年と2015年に刊行されたヘーゲル講義録(GW23.1. 2.)が示しているのも、『エンチクロペディ』第一版(1817)と第二版(1827)の間、特に1823年のホトー講義録に収められている「形而上学・論理学」から1826年の筆者不明の講義録にかけての「予備概念」の変遷である。さらに、ボンデリの『ラインホルトにおける端緒の問題』(1995)は、『差異』論文でのラインホルト『19世紀初頭の哲学の状態を概観するための寄稿』に関する批判の妥当性や、それ以降の哲学の端緒と導入に関するヘーゲルのラインホルト評価の変化を論じている。

そこで、本発表では以上の研究の趨勢を鑑み、特に近年公刊された講義録から明らかになる知見をもとに、ヘーゲル哲学における導入と端緒について再考することを試みる。その際に、特に着目することになるのは、『エンチクロペディ』第二版・第三版と1823年から1831年にかけての講義録における「予備概念」、そして『大論理学』の「学は何からはじめられなければならないか」という節である。

1826年にヘーゲルはダウプ宛の手紙の中で哲学の導入の難しさについて次のように述べている。「私がそこで区別した諸立場[思想の客観性に対する三つの態度]の論述は流行の関心に適うようにという意図に基づいています。しかし私にとってこの導入はいつそう難しくなりました。というのもこの導入はただ哲学そのものの前に位置し、そのうちに位置するのではないからです。」ヘーゲルはこの導入の問題に後年も取り組んでおり、実際に、『エンチクロペディ』第二版では、その哲学の導入にあたる「思想の客観性に対する三つの態度」をより詳細に論じ、また『大論理学』存在論第二版でもこの導入の難しさに言及している。本発表では特に「思想の客観性に対する三つの態度」の三つ目の態度「直接知」における直接知と媒介についての記述と、『大論理学』第二版における学の端緒における直接性と媒介性の不可分さとの連関を明らかにすることを試みる。

アダム・スミス『道徳感情論』における自然神学

太田 浩之 (社会学研究科 博士後期課程)

報告は、アダム・スミスの『道徳感情論』における自然神学的枠組みと道徳理論との関係を、主にテキスト内在的な分析によって明らかにすることを、目的とするものである。

経済学理論にとどまらない、スミスの多様な側面を把握するという近年のスミス研究の傾向にあって、自然神学とスミスの思想の関係は、決して他の分野に比べて研究が進んでいる領域ではないが、それでも以前に比べ着目されつつある。スミスの神学観は、主に『道徳感情論』から把握することが可能であるが、彼の理論が自然神学と密接に関係しているということは、明らかであり、これはスミスが、『道徳感情論』において、度々彼の理論的帰結を、自然Natureの意図であるとしていることから理解が可能である。しかし、それでは実際に、具体的に、スミスの自然神学的枠組みと、彼の理論がいかに関係しているのか、ということに関しての研究は十分には行われていないように思われる。

実際、スミスの自然神学に関する先行研究には、スミスの自然神学的な枠組みと彼の理論との関係を把握するというよりも、スミス自身の宗教（信仰）的立場を推測するという点に最終的な目的を置いているものが少なくない。しかし、こうした試みは、資料的な側面において決定的な要素を欠いているため、多くの推測を許すものになっており、スミス研究において大きな成果を挙げているとは思われない。ここで、我々が着目をしなくてはならないのは、スミスが、いかに自然神学的な枠組みを『道徳感情論』に導入しているにしても、彼が最初に出版したのは、まさにその本であるということである。つまり、スミスは『道徳感情論』を論じる前に、自然神学に関する著作や論文を出していないのであり、『道徳感情論』がそれなしでも論証として成立しようと、少なくともスミスはみなしていたと考えられるのである。したがって、『道徳感情論』の自然神学に関する記述からスミス自身の宗教的立場を論じるということは、『道徳感情論』それ自体が、神の存在と属性を証明することを目的とした書物ではない、という限りにおいて、ある意味で不適切な試みであると言えるのである。

確かに、『道徳感情論』の記述から、スミス自身の宗教的立場を読み取ることは可能であるが、そこに展開されている自然神学的枠組みは、まずもって、スミスの道徳哲学理論との関係で捉えられる必要があるのであり、その場合に、より正確にスミスの意図が把握されることが考えられる。本報告は主にこの点に焦点を当てたものであり、彼の自然神学が道徳哲学理論とどのように整合的に把握されるのか、その関連を示すことを目的とするものである。また、この報告によって、自然神学が、『道徳感情論』のみならず『国富論』を含んだ彼の思想において重要な役割を果たしているということもある程度示したい。

一橋大学哲学・社会思想学会

個人研究発表募集のご案内

2017年夏大会の個人研究発表を下記の通り募集します。会員の皆様の日ごろの研究成果の発表の場として奮ってご応募ください。

【募集内容】

- 1) 第21回大会（2017年6月第1土曜予定）の個人研究発表
- 2) 発表形態 90分型：発表時間45分、質疑応答時間45分
60分型：発表時間30分、質疑応答時間30分
いずれも、任意のテーマ。
- 3) 募集人数 若干名（教員による査読あり）※査読について採択基準参照のこと。
- 4) 募集期間 2017年1月10日（火）～1月31日（火）まで
- 5) 応募資格 本学会会員に限る（哲学・社会思想ゼミ生は会員。詳細は会則参照のこと）。

【応募方法】

発表希望者は、下記の必要事項を「学会発表申込書」としてA4用紙に記入、募集期間内に学会事務局までご提出ください（メールでの応募可）。

- 1) 氏名・フリガナ
- 2) 所属研究科・学年・所属ゼミ（課程修了者は出身ゼミと現在の所属）
- 3) 発表タイトルと発表要旨（1200字以内）
- 4) 発表形態の希望（90分型、または、60分型）
発表希望者は、90分型または60分型のいずれかを選択してご応募ください。
ただし、当日の時間の都合上、こちらで調整する場合があります。申込者多数の場合は、発表が冬大会になる可能性もあります。
- 5) 連絡先メールアドレス（メールを使用しない場合は、住所と電話番号）

【提出先】

メール送信先 phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp（事務局メールアドレス）

郵送先 〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学社会学部社会思想共同研究室気付け

一橋大学哲学・社会思想学会 事務局あて

【採択基準】

1. 主題が明確であること。また、背景説明によりその意義を示すこと。
2. 主題に取り組む着眼点、アプローチを明確にすること。
3. 何をどこまで議論するのかを明確に示すこと。

応募結果は3月中にお知らせします。